

おしえて、エコチル先生！（第5回）

国立成育医療研究センター 大矢幸弘先生
(聞き手：千葉大学准教授 戸高恵美子)

おしえて！エコチル先生、小児アレルギーの専門医であり、エコチル調査の「メディカルサポートセンター特任部長」でもいらっしゃる、国立成育医療研究センターのアレルギー科医長、大矢幸弘先生にお話を伺いました。

- ー 最近、子どものアレルギー疾患が増加していると言われますが、本当でしょうか。また、具体的にはどのようなアレルギーが増えているのですか。

先進国では、40年ほど前から急増しています。ただ、ここ10年ほどはほぼ横ばいになってきている国が多いようです。子どものアレルギー疾患の代表としては気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーの3つがあり、アレルギー性鼻炎やアレルギー性結膜炎は大人の方が多いです。食物アレルギーの原因物質で子どもに多いのは卵、牛乳、小麦、ピーナッツなどで、年齢が高くなるにつれ卵、牛乳などは減りますが、エビカニが増えてきます。

- ー お母さんが妊娠中に特定の食品をたくさん食べると生まれた子供がその食物のアレルギーになりやすい、と聞きますが。

かつてはよくそう言われましたし、そう思っている人は多いのですが、実はそのような事実は実証されていません。

妊娠中の母親をランダムに二つのグループに分け、一方は食物制限なし、もう一方は卵や牛乳などの食物アレルギーの多い食物を制限した食事を取ってもらう研究が報告されていますが、生まれてきた子どもの食物アレルギーやアトピー性皮膚炎はどちらも同じくらいの発症率でした。つまり妊娠中に母親が食物を制限しても予防効果はない、ということです。ですから、日本を含め多くの先進国のガイドラインでは妊娠中の母親の食物制限を推奨していません。

食物アレルギーは、炎症のある皮膚からのアレルギー原因物質の吸収によって発症する可能性が高い、という仮説が最近有力になってきました。たとえば、小麦の成分が入った石けんを使った人が小麦アレルギーになってアナフィラキシーを起こしたという報告が相次いでいます。最近、ナッツ類のオイルでスキンケアすることが流行していますが、精製度の低いピーナツ油（つまりピーナツの抗原蛋白成分を含む）を荒れた肌に塗ることにより、肌からピーナツの抗原蛋白が進入してピーナツアレルギーを発症する危険性が指摘されています。

その食品を大量に食べたからといって食物アレルギーになるということは実は確認されていないのです。

ー それは「目からうろこ」のお話ですね。食物アレルギーの原因が皮膚からの吸収によるとは。

1500人の子どもを対象とした出生コホート調査でわかってきたことなのですが、0歳の時点でしっしんの出ている子どもはその後食物アレルギーになる確率が増えます。また、1歳の時点で食物アレルギーのある子どもは、0歳の時点でしっしんのトラブルがあった場合が多いのです。また、昔からアトピー性皮膚炎と食物アレルギーの合併率が高いことは知られていました。『食物アレルギーの主な原因は皮膚経由ではないか』という考え方がここ数年急速に専門家の間では広まっています。

ー アレルギー疾患は遺伝するとも言われますね。

たしかに、子どもは親と同じアレルギー疾患になりやすいということはありません。ただし、単純な遺伝だけではわずかに一世代の間に急増したメカニズムを説明できません。アレルギー疾患に關与する遺伝子はすごく沢山あるのですが、一部の遺伝子が環境の変化の影響を受けやすい人がいます。そうした遺伝子が子どもに伝わると子どもも環境の影響で親と同じアレルギー疾患を発症し易い、ということは考えられます。そうした人たちは、別の環境ではアレルギー疾患を発症しません。ですからどのような遺伝子を持つ人が、どのような環境の影響を受けやすいのか、がわかれば対策が立てやすくなります。世界中の研究者が、そのような遺伝と環境の相互作用を調べていますが、エコチルでも日本人の遺伝子のなかに環境の影響を受けやすいものがあるのではないかと考えて研

究を進めていくことになるでしょう。また、外国のコホート研究と協力して、人類に共通の遺伝と環境の相互作用のメカニズムを明らかにする構想もあります。

- とても意外な気がします。これまでアレルギーの常識と考えられてきたことが最近くつがえされているんですね。

アレルギーには『迷信』が多いのです。たとえば、小児ぜんそくを予防したり治すために、子どもをスイミングスクールに入れる、という親御さんは多いですが、プールの水には感染症予防のために塩素が混ぜられています。この塩素に長時間曝露されると、呼吸器系がやられて、ぜん息が悪化する危険性を欧州の学者が指摘しています(多くの子どもは週に数時間スイミングスクールに通う程度なので、そのくらいではほとんど悪影響はないと思われます)。小児ぜんそくは学童期に、年齢と共に自然治癒する方が多いのですが、ちょうどプールに通う年齢に一致しています。プールに通わせたからぜん息が治った、と思いがちですが、実は自然治癒した、というケースが多いのではないのでしょうか。また、ぜん息は乳幼児期には男の子の方が多く、思春期以降では逆に女の子に多く見られるようになります。このことから、おそらくホルモンの影響を受けるのではないかとも言われています。

- アレルギーの原因はまだまだ分からないことが多いですね。大矢先生はエコチル調査によってどのようなことがわかると期待されていますか。

これまで、欧米の出生コホート調査は数多く行われてきましたが、日本ではあまり行われていませんでした。さまざまな欧米のコホート調査で報告されていることが、本当に日本にも当てはまるのかどうか、このエコチル調査で明らかになるのではないのでしょうか。食べ物やライフスタイルなどももう少しきちんと調べる必要があると思います。それから、エコチル調査によって、今あるいろいろなアレルギー疾患の迷信が打ち破られるかもしれません。子どもの健康のために親御さんは一生懸命良かれと思っていろいろな療法や食事を試されます。たとえば、ロハスブームに乗ってお腹の中の赤ちゃんのために食習慣をがらりと変える人がいますが、危険が伴うこともあります。アレルギーに関するものはビジネスとして大きな分野になってしまっているので、いろんなノウハウ本

や民間療法の薬など多く出回っています。本に書いてあるから、テレビで取り上げられていたから安心、と思わず、日本アレルギー学会や日本小児アレルギー学会など国際的にも認められた学会が発信する情報と矛盾していないかどうか確認した方がよいと思います。

— 大変貴重なお話をありがとうございました。

(2012年3月26日)

■今月のエコチル先生

大矢幸弘 先生

エコチル調査メディカルサポートセンター特任部長
独立行政法人国立成育医療研究センター
生体防御系内科部 アレルギー科医長